

無標、有標の言語学

大橋 克洋

アブストラクト

「無標、有標の言語学」序論という名の講義をいつか実現したいとおもっている。その想定上の連続講義の、いわば事前の講義録が本稿である。有標理論はプラハ学派に発祥し、二十世紀の言語学会を席捲した。のちに生成文法家たちの手で注目すべき発展をみたとはいえ、理論の自家はあくまでヨーロッパの構造主義言語学である。本稿は有標理論の水源にさかのぼってその概要をつたえようとするところみであり、無標・有標のなんたるかを知らない層を潜在的読者として書かれている。

言語はかたちをもたず、とらえどころのない実体に見える。だが、その体内に秘蔵されている二項対立の脈脈を掘りあてれば、言語の基層をなしている整然とした構造はとらえられ、獲物を射抜くような一貫性をもって言語を記述することができる、と有標理論はいう。二項対立は無量に存在する。それらを発見し、対立する二項を無標形と有標形に振りわけ作業はかならずしも容易でないが、言語の謎をひとつひとつ解き明かすようなよろこびがつきまとう。作業の困難さにたえる努力は、このよろこびをあじわい、かつ視界を一挙にひろげるための必要投資だとおもわねばならない。言語教育へのゆたかな応用性もこの理論の付加価値としてよい。有標理論の立場から日本語や英語の教科書が書かれれば、教育の景色はまたちがったものになるであろうとおもわれる。

キーワード：構造主義言語学、有標理論、二項対立、非対称、無標、有標

1. はじめに

わが国に来世信仰をもつ日本人がいまどれほどいるだろうか。人間の生存に現世の生存と来世の生存があると信じきっている成人日本人はごく例外的にしか存在しないのではないか。そもそも現世、来世ということば自体が、それを一對のものとしてとらえる習慣とともに、滅びかかっているようにもおもえる。この観察がおおきくはずれていないならば、こういうことにならないであろうか。来世をおもうところをうしなした現代日本人は無信仰といわれるかもしれない。だが、だれもがそうである以上、これは恥じるようなことでもなければ、そもそも説明をもとめられるような特別な生存観ですらない。逆に、もし来世での生存を信じて疑わず、かつそのことを公言してはばからないひとがいるとすれば、そのひとこそ理由説明をもとめる周囲の声にこたえなければならぬであろう。現代日本ではそれが特殊な生命観であるからだ。

似たような例に生と死の対立がある。生は動機づけられない。いつうまれたかをきかれることはあっても、なぜうまれたのかときかれることはないし、たとえきかれたとしても、自らの意思でうまれたわけでない以上、こたえようがないという意味である。おおくのひとは自分がうまれ、いきていることの不思議さをおもうこともなく、あたりまえのようにいきている。右ききのひとが右ききであることに無頓着なのに似ている。右ききであることが常識的とされる社会ではきき腕が右であることが常態としてまかりとおるのと同程度に、いやそれ以上に、生は常態としてまかりとおっている。なぜ？ どうして？ という問いは、ひとが突如生をおえたとき、傍（はた）から発せられるものである。死は動機づけられ、話題にされなければならない、常ならぬ事態である。

アリストテレスが事物の本質を形相と質料の二原理でとらえたとき（『形而上学』）、この哲学者は宇宙を二項の対立で観測する知的伝統を草創したのであった。これがヨーロッパ中世のスコラ哲学に相続され、そして近世以後の二元論哲学へと受け継がれていった。二十一世紀に生きるわたしたちの知的生活をみわたせば、アリストテレスが文明史に穿

た足跡のおおきさはうたがうべくもない。人間と動物、男と女、親と子、自己と他者、公と私、善と悪、美と醜、精神と肉体、YesとNo、either...or...、プラスとマイナス、アナログとデジタル、ハードとソフト、はじまりとおわり、有限と無限、偶然と必然、上と下、表と裏、白と黒、右と左、多数派と少数派…。わたしたちの日常生活は二項対立にかこまれている。

注釈めくが、“わたしたち”を日本人にかぎるならば、西洋哲学よりもさきに中国哲学から“わたしたち”は受益している。周知のとおり、日本人がヨーロッパ文明の洗礼をうけるのは近代にはいつのことであり、西洋の二項対立が受容されるのも、よし江戸時代初期にはじまった蘭学の系譜のなかからかすかにそれが漏れ入ったとしても、本格的には明治維新以後のことである。しかし、前近代の知識層はすでに陰陽(五行)説、天地(玄黄)論、性善説と性悪説など、中国舶来の哲理をとおして二項対立という認識方法をえていたはずである。が、そのことはいい。

情欲と禁欲という二項対立を例にとろう。ユダヤ教圏、イスラム教圏、キリスト教圏、正教圏、儒教圏のすべてがこれを単なる二項対立にとどめず、禁欲を貴(たか)し、情欲を賤(いや)しとする非対称の対立でとらえ、性におおらかであった古代ギリシャ文明やそれを享受すべきものとみなす日本文化とは対照をなしている。この事実がおしえる教訓はつぎのようなものである。哲理としての二項対立は情欲と禁欲を対立させることで自足する。ところが、この哲理が文化のなかに運びこまれ、かこいこまれるや、対立する二項がなんらかの偏向解釈にさらされざるをえず、本来の均衡をうしないやすいということである。情欲と禁欲のばあいがあるし、冒頭の二段落に例示した現世と来世、生と死もこのことをまぬがれない。科学とことなり、文化が非普遍的な価値観の体系であることによる。わたしたちの日常卑近な生活に充溢しているのは、哲理としての対称的二項対立であるというよりも、いっぽうの項(たとえば右きき)を常態、他方の項(たとえば左きき)を非常態とみる非対称の二項対立のほうであるといえよう。

2. 構造主義言語学と二項対立について

各文化が各様に共有している非対称二項対立意識に重大な関心をよせた言語学者たちがいる。第二次世界大戦前のプラハを拠点に構造主義言語学を飛躍させた世にいうプラハ学派であり、活動の中心にいたのはニコライ・ツルベツコイ(1890-1938)とローマン・ヤーコプスン(1896-1982)であった。のちに有標理論の名でしられるようになる言語学理論はこのふたりの友情がうみ落としたものである。1930年の夏、フランス滞在中のツルベツコイから、言語の分析に標示(mark)の概念を導入することの意義をつづった手紙がヤーコプスンのもとにとどく。したにかかげるのは、これにこたえるヤーコプスンの返書の一節である。理論が芽吹きつつあったころの情景をいまにつたえる、歴史的書簡といってもよい。

言語に内在する二項の対立を有標値と無標値のあいだの力学的関係とみるおかんがえは、貴兄がこれまでにしめされた知見のなかでもとりわけ炯眼で、ひろがりゆたかなものだという思いが、わたしのなかで日に日に確信となりつつあります。言語学のみならず、民族学研究や文化史研究の前進のためにも重大な触媒となるにちがひありません。生と死、自由と束縛、徳行と罪業、週日と休日などなど、歴史文化のなかに取りこまれた二者関係は口裏をあわせたようにAとnon-Aの対立に安定をみいだします。それぞれの時代、それぞれの集団、それぞれの民族にとって、なにが有標値であるかをみさだめることは切実に重要なことなのです。思いついたまま書くのですが、詩人のミジャコフスキーは生というものを動機づけられてはじめて実現される有標値とみました。彼にとっては、死ではなく生のほうが動機づけを必要としたのです。(中略)また、こういうこともあります。かつてソヴィエトには「われわれに敵対しないものは同志である」というスローガンがありました。いまではそれが「われわれにくみしないものは敵対者である」というスローガンに席をゆずりつつあります。(中略)これも貴兄のかんがえに触発されてうまれた確信といえますが、一見えらぶところのなさそうな民族学的現象やイデオロギーなども、ある制度のもとでは有標であるが、ところをかえれば無標以外のなにものでもないといったばあいが往々みとめられるものです。

(1930年11月26日付け)

若きヤーコブスンのこころの昂揚が行間にはじんでみえる。この手紙から察するに、無標・有標の原理はツルベツコイが着想し、僚友のヤーコブスンが共鳴したという運びになるが、書簡の往復からわずか八年後に世を去ったツルベツコイにくらべて、ヤーコブスンはながく春秋をたのしんだだけでなく、若き日の知的興奮を生涯にわたって持続させたところから、いまでは先唱者のツルベツコイをさしおいて、ヤーコブスンの名が有標理論とともにある。ここでは、ヤーコブスンのことの葉をひろいながら、この理論の中核をなすかんがえを紹介していきたい。ただし、概念の例証には英語と日本語による独自例をもちいる。

3. 非対称 (A と non-A) について

前掲の手紙にでてくる「A と non-A」は非対称をあらわしている、とだれもがおもう。誤っているわけではないが、そういっただけではすませられない含蓄がじつはある。まず、つぎのようなばあいをかんがえてみよう。ある大学の上級英語の授業を 25 名の日本人学生と 5 名の外国人学生が受講しているとする。そして、学期第一回目の授業で教師はこの受講者構成に触れて、“There are twenty-five Japanese students and five non-Japanese students in this class.”といったと仮定してみる。ここにもちいられた Japanese と non-Japanese という矛盾対当¹が A と non-A にあたるとかんがえればよい。発話者の実意かどうあれ、すくなくとも表現上は日本人学生優遇政策が表明されていることになるであろう。日本人学生がこの授業をうけることはさしつかえのないこと（常態）だが、外国人学生はここでは特別な存在（非常態）なのだ、という非対称の二項対立意識が言語に憑依し、その結果が Japanese (A)、non-Japanese (non-A) という不均衡な語形の対(つ)い)となったのである。このばあいの Japanese を無標形、non-Japanese を有標形という。日本人であることは常態であるから、Japanese という語形は無造作につかわれてかまわないが、外国人であることは非常態であるから、その非常性をしめす外的標示 (non-) がいるという論理が有標形 (non-Japanese) の造形を正当化している。すなわち、常態は無標形に、非常態は有標形に結像するのである。

教師がおなじことを日本語で「このクラスには 25 名の日本人学生と 5 名の外国人学生がいます」といったばあいはどうであろうか。(不熟な日本語ではあるが)「非日本人」が non-Japanese に相当する有標形であることはすでに自明であろう。ちょうど上例で non- がそうであったように、ここでは「非」が非常態をあらわす外的標示として使われているにすぎない。しかし、「非日本人」は有標形であるが、「外国人」はそうではないとはいえない。日本人(内国人)を基本態とし、非日本人をそれからへだてたいという疎外的な対立願望が、(留学生ではなく)「外国人」学生という表現をえらばせたとかんがえられるからである。「non-Japanese 非日本人」と「外国人」のちがいは、前者が明示的な有標形であるのに対し、後者は暗示的な有標形にとどまっていることにすぎず、どちらも有標形であることにはかわりはないのである。このようにかんがえれば、ヤーコブスンが A と non-A の具体例として、生と死、自由と束縛、徳行と罪業、週日と休日という反対対当²をあげたことも納得できる。四つの対(つ)い)の右項の語はいずれも暗示的な類の non-A (有標形) であるとおもえばよい。死は生がもっている価値をうしなった状態であり、束縛は自由がおびている特徴を放棄した状態であるから non-A なのである。ヤーコブスンもツルベツコイも、「常態は無標形に、非常態は有標形に結像する」というばあいの有標形をかならずしも外的、明示的な形態に限定しなかった。「A と non-A」はゆだんのならない、クセのある比喩であるとおもわねばならない。それを理解することが有標理論にせまるためのまず最初の要訣である。

4. 明示性の幅について

non-, de-, in-, a-, 不、非、没、超などの接頭辞を外的標示とする有標形は耳目を刺戟する。このように、言語共同体が共有する非対称の対立意識がいつも明示的にその言語にうつされるのであればとまどいはすくないであろうとおもわれる。暗示的な対立にくらべて、明示的な対立は認知処理がたやすいからである。だがここにも問題はないわけではない。明示的な対立にもさまざまな様態があり、したがって明示性の度合いにも幅がでてくるためである。non-, in-などを有標形標示とする矛盾対当が発見しやすいのは、それらがきわめてたかい明示性をほこり、もっとも認知しやすい明示的な対立に属するからにほかならない。しばらく明示的な対立にこだわって、現代日本語を例に、明示性の幅についてかんがえてみたい。

(1) 現代日本人はひらがなを通常態、カタカナを非通常態とみなす非対称対立感覚を共有している、といわれておどろく日本語使用者はいまい。カタカナが特別な用途(欧米語起源の借用語、擬容語、専門用語など)にしかつかわれないという、初級日本語学習者でさえしている使用実態にもとづいた指摘であるからである。しかし、だとするならば、ひらがな(常態)は無標形、カタカナ(非常態)は有標形ということになるが、カタカナのいったいどこに有標形ならではの標示がみとめられるというのか。これに対しては、カタカナはひらがなとは体系的に姿形がちがっているから有標形なのだとかたえるしかない。カタカナ46文字が一丸となり、いわばからだをはって「われは有標形なり」を標榜しているかっこうである。したがって、これもやはり明示的な二項対立にかぞえなければならない。多少のとまどいを覚えつつも納得されようが、non-やde-のケースとは小さからぬ隔差があるため、手引きされなければ気づかない向きもあるであろう。

(2) 漢字の音読みに呉音と漢音がある。六世紀に百済経由でもたらされた揚子江下流域の中国語音にもとづくよみが呉音であり、漢音の伝来に二世紀あまり先じた。奈良時代から平安時代にかけて取りいれられた漢音は唐の都長安の標準発音にもとづく。平安中期に新来の漢音が正音の位置にすわって以来、呉音は周辺化されて現在にいたっている。表1にみるように、一般の漢語は漢音、仏教関係語は呉音という区画化がわりではない。公式化すれば、「漢音は常態(一般用語)・無標形、呉音は非常態(仏教用語)・有標形」ということになるが、このばあい、呉音を有標形たらしめている標示はどこにもとめるべきなのか。やはり体系である。音声体系として呉音は漢音とは組織的にことなっている。このことなりが呉音の異質性を標示しているとみるべきである。(視覚ではなく)聴覚にうたえる明示的の二項対立のケースといえる。

表1

		明	行	生	男	女	人	家	会	美
無標	漢音	めい	こう	せい	だん	じょ	じん	か	かい	び
有標	呉音	みょう	ぎょう	しょう	なん	によ	にん	け	え	み

(3) 二十世紀前半につくられた guesstimate (あて推量する) は一度見聞すればわすれられなくなる語である。guess と estimate の一部が接続してできたかばん語 (portmanteau word) の好例で、専門的には混成語 (blend) という。おなじ造成過程をへた語に smaze (smog + haze)、monokini (mono- + bikini)、gi-normous (gigantic + enormous)、cosplay (costume + play) などがある。brunch、smog、motel はいずれも十九世紀末~二十世紀はじめのうまれながら、いまや混成語の古典として仰がれる。さて、混成語の guesstimate は、別角度からみれば混種語 (hybrid) でもある。ことなる言語の交配によって形成された語をこうよぶのであれば、ゲルマン諸語 (guess) とラテン語 (estimate) の要素を配合した guesstimate はまさにその名でよばれるにふさわしい。monokini (トップレスの女性水着) にいたっては、環礁名の Bikini を bi-kini (ふたつのキニ) に異分析したあげく、bi-を mono- (ひとつを意味するギリシャ語系接頭辞) にすりかえた、混種語の逸品とさえいえる。

表2に重箱読みと湯桶読みを例示した。「訓+訓」および「音+音」という漢語のよみかたの原則にあらがって、音+訓(重箱読み)そして訓+音(湯桶読み)が交雑するのであるが、組み合わせのいっぽうは日本語固有のよみであるのにたいし、他方は中国語を原音としているところに着目すれば、重箱読みと湯桶読みは混種語といえなくはない³。ここでは、「原則的なよみかた(訓+訓、または音+音)が常態・無標形で、重箱読み・湯桶読みは非常態・有標形」である。重箱読み・湯桶読みの音声的混種性が有標標示となっている。これも聴覚刺戟型の明示的対立にはちがいないが、漢音・呉音のばあいよりいっそう明示性の度合いがさがり、暗示的対立に接近してくる。有標理論への素養をある程度やしなっていなければ、対立の存在そのものに気づかないであろう。

表 2

有標形	重箱読み	りょうがえ 両替	とうどり 頭取	だんご 団子	ほんや 本屋	ばんぐみ 番組	おうて 王手	そうみ 総身
	湯桶読み	てせい 手製	にもつ 荷物	あまぐ 雨具	けしいん 消印	のじゆく 野宿	みほん 見本	みちじゆん 道順

以上の三例はいずれも明示的二項対立の枠内にありながら、おたがいのあいだにちいさからぬ水位の差がある。(1)から(2)へ、そして(2)から(3)へと、番号の昇順に明示性の水位がさがるようにかんじられる。暗示的対立のみさだめがたさやかばかりであろうといささか悲観させられるが、そちらの実例は5章以下に小出しすることとする。

5. 無標形、有標形の示差指標について

無標形(A)と有標形(non-A)の対立を二類にわけた。対立が存在することを発見し、かつ対立項のどちらが無標形どちらが有標形であるかを特定すること。わたしたちの視界をあかるくするためには、このふたつの手続きをふむことが必要なのであるが、そのことが比較的やさしいのは、無標形と有標形のちがいが視覚や聴覚で感知できる明示的対立のばあいである。暗示的対立は発見することそのものが容易でないうえに、どちらが無標形でどちらが有標形であるかを判別することもしばしばむずかしい。以下に、無標形・有標形判別の有力なてがかりと目される指標を五つしめし、参考に給いたい。5.1の例をのぞき、もちいられる実例のほとんどは暗示的な対立である。

5.1 ながさ指標

いうまでもなく、無標形と有標形の対立が明示的なかたちをとっているばあいにしかこの手はつかえない。語形の長短が示差指標となる。“一般的に”ということわり書きがいるが、対立する二項のみじかいほうが無標形、ながいほうが有標形とかがえてよい。さきに接頭辞の付着が有標形の外的標示となるケースをみたが、おなじことは接尾辞の付加についてもいえる。二例をあげる。

英語話者がはやくから、単数は常態、複数是非常態という非対称の二項対立意識をそだて、わかちあっていたことについては、いくつかの証拠がある。英語史の早期段階から接尾辞の-enが複数標示としてつかわれていた事実(ox→oxen, eye→eyen, shoe→shoen, cow→kine, foe→foneなど)もそのひとつである。モノはふつう単体で存在する(単数は常態)、二体以上で存在することは特殊な状態である(複数是非常態)とする認識が共有され、これが単数形と複数形のサイズのちがいをもたらした。古英語の晩期以降は-enが-(e)sに道をゆずったとはいえ、「単数(無標形)は短、複数(有標形)は長」の原則自体はかわらない。

類例として動詞の現在形と過去形の対立があげられる。現在形(たとえばwalk)に虚辞のdidをそえて、両者を結んだ(walk+did)ところから過去形(walked)がうまれたとする提説⁴がかたると、英語はまず現在形を所有し、過去形が後発した。現在形が過去形よりもはるかにしげくもちいられる時制形式である以上、この発生順序をとがめだてすることはできず、したがって現在形は常態・過去形是非常態という感覚がやしなわれたことも奇とするに足りない。-(e)dという過去形語尾をどう発音しようと(/d/,/əd/,/t/)、現在形よりも音素(言語音の最小単位)数がふえることは否定しようのない物証事実である。ここにも「常態・無標形は短、非常態・有標形は長」という原則があざやかにあてはまる。

ちなみに、形態の長短という示差指標を応用するならば、肯定文、能動態、叙実法は無標形、たいする否定文、受動態、叙想法は有標形という論を結ぶことも不可能ではない(表3参照)。

表 3

	短 (無標)	長 (有標)
単複	単数 boy	複数 boys

活用	現在 walk	過去 walked
平叙	肯定 I am a vegetarian	否定 I am not a vegetarian
態	能動 The bird ate	受動 The bird was eaten
叙法	叙実 I hope I <u>can</u>	叙想 I wish I <u>could</u>

5.2 規則性

この示差指標は、対立する二項のあいだにはっきりとした勢力不均衡がみとめられるばあいにはのみ有効である。二例をしめす。

-en 複数の盛時はまた変母音複数 (mutation plurals) が盛行した時期でもあった。単数形に含まれる母音を変音することによって複数形を標示することを母音変異 (mutation または Umlaut) といい、生産性をうしなつてひさしい。feet (foot), teeth (tooth), geese (goose), men (man), mice (mouse), lice (louse), brethren (brother)らの変母音複数現代をさまよう古英語の亡霊である。5.1 にのべたように、古英語後期に台頭してくる-(e)s 複数がそののち規則形とみなされるにいたり、変母音複数は-en 複수와手をたずさえるようにして衰退にむかった。book の変母音複数 beech が books に転向したり、brooc の変母音複数 breech がさらに-es 語尾を付接して breeches (乗馬用ズボン) という二重複数がうまれるなど、-(e)s 複数の影響力が変母音複数におよぶことはあっても、その逆はたえて起こらなかった。中英語期以後の英語話者のあいだに、「-(e)s 複数は常態・無標形、変母音複数は非常態・有標形」という感覚が共有されたのはけだし当然のことであった。さて、ここで無標形と有標形をわけているものとはといえば、それが前節であつた寸法の差 (5.1 参照) であるとはかんがえられない。無標形 (books) と有標形 (beech) のあいだに気になるほどのながさの差はないからである。わたしたちは別種の示差指標を設定しなければならないが、その新指標は規則性名でよばれることがふさわしい。上例のできごとのなぞはこの指標を樹てることにより快速に氷解する。規則形の圧服力といたらいいだろうか。対立する二項のうち規則形 (regulars) とみなされた項が圧倒的な勢威をもって不規則形 (irregulars) を衰滅に追いこもうとする情景は言語史のなかにたびたびあらわれる。ここに例示したような、いちじるしく均衡を欠いた二項対立が成立するのはこのことの結果である。

つぎにかたるのは later, outer の出生秘話である。中英語では単音節形容詞の長母音 (二重母音をふくむ) が比較級で短母音化することがおこつた。たとえば、deep, greet (great) という原級は、depre, grettre のように、比較級では強勢音節の母音を圧縮させたものであった。次代になって deep-deeper, great-greater に落ちつき、建築美をみせるようになるが、中英語のすがたを近代にもち越した比較級がふたつある。latter (←late), utter (←out) がそれで、ひとつひとつから異形 (いぎょう) とみられたのであろう、やがて民間から later, outer というあらたな比較級が起るのである。こんにちでは後進の later, outer が正規の曲用 (declension. 形容詞の屈折) あつかいをうけ、latter, utter は使用幅をせばめたうえで健在している。健康な感性をもつ現代英語話者に時間をあたえて考えさせれば、deeper, greater, later, outer は常態・無標形、latter, utter は非常態・有標形とこたえるにちがいない。そのときかれらが示差指標として樹てるのも規則性である。対立項のいっぽうがたった二語で構成されるという、いちじるしく勢力バランスを欠いた二項対立であることによる。下世話にいう多勢に無勢、学校教師の言いぐさをかりれば、規則と例外のケースである。

ヤーコプスンの手紙が言及する「言語に内在する二項の対立を有標値と無標値のあいだの力学的関係」とみるかんがえはいかにも構造主義言語学らしい言語観であるのみでなく、有標理論の要所を衝いたことばとしてもうつくしい。その意味を、本節の文脈にそくして解釈すれば、つぎのようになるであろう。近代英語は強勢音節の長母音 (二重母音をふくむ) を圧縮させない比較級曲用 (deep-deeper, great-greater, late-later, out-outer など) を常態・無標形として確立させた。ところが、わずかにのこる latter, utter という中英語直系の圧縮形が非常態・有標形としていまにのこり、せまい意味域内ながら軽快に機能している。無標値と有標値のあいだにながしかの緊張関係をつくりだしているのは、このばあい近代英語への歴史の介入にほかならない。後代の規則 (無標形) と歴史遺産 (有標形) がひとつ言語体のなかに併居する状態がもたらすあつれきなのである、手紙にいう力学的関係のひとつの解釈は、この間の機微を理解しなければ

ば、有標理論にたいする理解がゆるむであろうし、ひょっとしたら、言語という成長体そのものへの肉薄の強度もおちるかもしれない。

5.3 繁度

ながさ指標 (5.1) と規則性指標 (5.2) は適用範囲が限定的であるのにたいして、繁度指標のおよぶ範囲はきわめて広闊である。その意味では、かずある指標のなかでもっとも利便性と汎用性にとんでいるといえる。前節でとりあげた規則性と本節の繁度を対比させて、適用範囲のちがいを浮びあがらせてみよう。

規則形は常態、不規則形は非常態というのが 5.2 の要諦であった。ここで問題にすべきは、規則形 = 常態、不規則形 = 非常態という置換が普遍的に成立するかどうかである。こたえを先どりすれば、否である。ことはそう単純ではない。規則形はいつも常態であり、不規則形はかならず非常態であるとかんがえるのはよい。だが、その逆は真実ではないところに無標・有標対立のおおきさとあつかいにくさがある。常態がいつも規則とよばれるわけではなく、非常態がかならずしも不規則とみなされるわけではない。はやい話が、(1) 形容詞の原級と比較・最上級のあいだの明示的対立につき、原級 (常態・無標形) は規則形で、比較・最上級 (非常態・有標形) は不規則形であるということではできないし、(2) 直接疑問 (*Where does she live?*) と間接疑問 (*I know where she lives.*) のあいだにみとめられる非対称二項対立について、直接疑問 (常態・無標形) を規則形、間接疑問 (非常態・有標形) を不規則形だということもできない。くどいようだが、規則性指標は無標形、有標形のあいだの力のバランスがおおきかたよっているばあいにしかつかえないのである。

もっと広範に非対称二項対立のおおきのケースをあつかって、無標形と有標形を截然と示差してくれる指標はないものか。ただひとつあるとすれば、繁度がそれである。繁度指標とは「対立する二項のうち、よりしげくもちいられる項を無標形と認知する」という黙契のようなものである。うえの (1) (2) 例をふくめ、これまで本稿に例示された二項対立のほとんどがこの暗黙の合意に従順である。規則・不規則の対立が目にもあざやかに裁ちわられた、数にかぎりのある対立であるとするれば、無標・有標対立は古い湖沼の底に似て、透視しにくく、無尽蔵ともいえるほどに多種多量である。繁度指標は不可視を可視化することによって、湖沼探査のむずかしさをいくぶんかはやわらげてくれるであろう。

なお、うえの (1) 例にかんしては、ながさ指標をつかっても、前者 (原級) は無標形、後者 (比較・最上級) は有標形の断がくだせるが、(2) 例はそのかぎりではない。いくつかの指標を重ねあわせて判別の精度をあげたり、状況におうじて指標のえり好みをするによって透視能力をたかめたりする技術を涵養する必要がある。

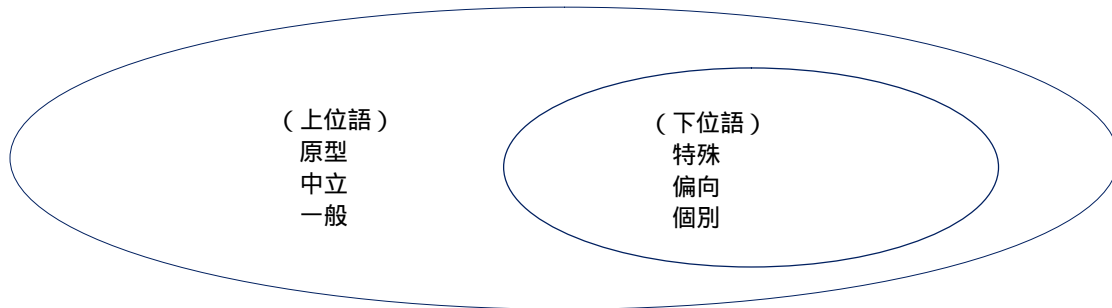
5.4 詳報性

旧約聖書の創世記にでてくるアダムとイヴのはなしを知らぬものはいまい。各種日本語訳聖書では、イヴの造形をさかいに、アダムのあらわし方が「ひと」から「おとこ」にかわっていくのがふつうである。こころみに、手もとにあったラテン語訳の旧約をみると、そこでもまったくおなじ転換が起こっている。イヴの出現を契機に、homo (ひと) から viro (おとこ) へとアダムを指表する語がかわっていくのである。需要のあるところにとばがあり、需要されないところにはとばは存在しない、という言理をひきだせるであろう。人間がひとりしかいないところにはよび分けの需要はないが、ふたり以上いるところではよび分けが需 (もと) められる。この需要がおとこ、おんなというあらたなとばをつくりだしたのである。

「うちの大学の日本人学生は…」という日本語が奇異にかんじられるのも、これで得心できる。学生の圧倒的な部分が日本人でしめられる大学環境のなかでは「うちの大学の学生は…」が自然である。「うちの大学の日本人学生は…」がなだらかにひびくのは国際的大学のばあいだけであろう。『古事記』(712年) と『日本書紀』(720年) のあいだに横たわるのも需要というキーワードである。近隣諸国との動的関係のなかに日本の歴史を位置づけよという需に応じたのが『日本書紀』の編纂事業であったにちがいない。そうでなければ、題名の一部として「日本」がもちいられることはなかったはずである。『古事記』の編纂者にはおなじ比較意識がうすくしか存在していない。

以上の実例考察からつぎのような帰結を演繹できる。ひだりの項にひと、学生、宇内 (うだい) があり、みぎの項に

男と女、日本人学生と留学生、日本と外国があって、左右の二項が対立をなしている。左項におかれた一概念が右項では二概念に細分化されているので(たとえば、左項の「ひと」にたいする右項の「おとこ」と「おんな」)この二項対立は非対称であるとしなければならない。したに、この種の非対称二項対立関係を図示したのは、これがいままであつかった二項対立のケースとおおきくことになっているからであるが、じっさいの言語はこのように、一項が他項を包含して二項が対立する事例を無量に蔵している。この類の非対象二項対立の発見とその二項の類別に効能をみせるのが詳報性という示差指標である。



ひだりの項を特徴づける形容辞としては原型的、中立的、一般的(または総称的)、またみぎの項の特徴づけには特殊、偏向、個別がもちいられてよいが、言語学ではそれぞれを上位語(superordinates)と下位語(hyponyms)とよぶ。実例のおびただしさはさながら押しよせる軍勢のようである。おもいつくままにあげれば、被造物にたいする生物と無生物、生き物にたいする人間と動物、宗教にたいする一神教と多神教、聖書にたいする新訳聖書と旧約聖書、日にたいする昼と夜、暦にたいする太陽暦と太陰暦、言語にたいする母国語と外国語、ことばにたいする話しことばと書きことば、財産にたいする共有財産と私有財産、雇用にたいする正規雇用と臨時雇用、動物に対する肉食動物と草食動物、獣にたいする野獣と畜獣、比喩にたいする直喩(または明喩)と隠喩(または暗喩)、絵画にたいする日本画と洋画、愛にたいする異性愛と同性愛、近代にたいする戦前と戦後、週にたいする週日と週末...

学者のあいだに上位語を常態・無標形、下位語を非常態・有標形とするコンセンサスがあるのはなぜだろうか。ながさ指標や規則性指標によるふり分けでないことはいうまでもない。繁度もきめ手とはならないであろう。上位語のほうがよりひんばんにもちいられるとはかならずしもいえないからである。暦年数(つまり、うまれが早いかわいいか)を指標にできるかといえば、そうもいえないことは、大きさにたいする大と小、長さにたいする長と短、遠さにたいする遠と近、強さにたいする強と弱などのばあいをかんがえてみればわかる。「-さ」という接辞がしめしているように、大と小、長と短、遠と近、強と弱という下位概念語がまずできて、しかるのちにそのいっぽうに「-さ」を接尾することにより上位概念語がつくられたのである。いつも、はやくうまれた上位語が、のちに下位語に細分化されるとはかぎらない。

おもいあまった言語学者たちがもちいる指標が詳報性である。上位語は図書館とよばれるおおきなハコに似て、類似の概念(ここでは、書籍)をいっしょくたにしてかかえこんでしまう。ひとくりにされた諸概念を個別化し、いちいちを詳述することはハコたるものつとめではなく、いっさいがっさいを包含してしまうところにそのもちあじがある。下位語はさながら司書がカードを整理するように、上位語を個々の概念にばらして、ひとつひとつを詳述することをもって実務とする。当然のことながら、「詳報性にとぼしい項が上位語(常態・無標形)、詳報性のゆたかな項が下位語(非常態・有標形)」となるのだという。

5.5 難度

なにやらはなしが抽象的になってきた。読者に投げだされないうちに、すくいの手をさしのべておきたい。無標形、有標形の識別につかえるひとつの便法がある。いまや人類の共有知的財産として世に出まわっている先賢の知恵をかりるのである。具体的には、言語学習の教材のことをいう。

一般的に、無標形は有標形よりもすくない認知努力で獲得できる、といわれる。換言すれば、「無標形は易、有標形は

難」ということになる。対立する非対称の二項のうち、おぼえやすく、使用しやすい形式のほうをこのみ、よりおおくもちいるのがひとの常であってみれば、そこから、やさしいほうの項が常態・無標形、むずかしいほうが非常態・有標形という意識がみちびかれることは自然ななりゆきとおもえる。これが「無標形は易、有標形は難」という難度指標の根拠となっている。

この難度指標をいきいきと活用しているのが言語教育である。英語の初級文法がおしえられ、まなばれる順序をかながえてみるがよい。(1) 過去形からはじまる文法教育は近代にためしがない。まず現在形からはいり、学習者がそれに習熟した頃あいのみはからって過去形を導入するのが正順である。(2) He/She/It eats からさきにおしえる英語教育もない。まず I/We/You/They eat に慣熟させ、しかるのちに三人称単数現在のばあいをおしえるのが常道である。(3) どのように、優等比較 (She is smarter than me など) をおしえたあと、劣等比較 (She is less smart than me など) にすすむのが定番である。第一章は冠詞、最終章は話法というふうに、教科書の編成全体を易から難へという秩序が射とおしていることはつとにしられているが、それだけではない。うえの(1)(2)(3)例のごとく、ひとつの文法項目(たとえば比較級)のなかに非対称の二項対立(優等比較と劣等比較)がみとめられるばあい、教科書はまず易(優等比較)からはいり、ついで難(劣等比較)にうつるという秩序のもとに進展する。この秩序を支配している原理(易から難へ)を逆手にとって、わたしたちは無標形と有標形をかるがると検知できるのである。うえの三例についていえば、さきにおしえられる現在形、I/We/You/They eat、優等比較が無標形、あとまわしにされる過去形、He/She/It eats、劣等比較が有標形であることが労せずして逆探知できる。

初級英語であつかわれる非対称二項対立をさらに六例掲示した(表4参照)。はじめの五例については、教科書の運動原理(易から難へ)がながさ指標(無標は短、有標は長)にピタリと一致していることがわかる。最後の不定詞にかんしてはこのかぎりではない。教育現場では難度、繁度ともに高い TO 不定詞をさきにおしえ、低難度、低繁度の原形不定詞をあとにまわしにしている。すくなくとも現代英語にかんするかぎり、繁度指標にもとづいて、TO 不定詞を常態・無標形としなければならないという判断によるものである。繁度指標の卓越した重要性をおもうべきであるし、有標理論への敬意が教科書編成原理(易から難へ)を抑圧しているケースとしても興味ぶかい。

表 4

	常態・無標形 (易、短)	非常態・有標形 (難、長)
不定冠詞	a (a child)	an (an animal)
平叙文	肯定文 (He is French-speaking)	否定文 (He is not French-speaking)
時制	現在形 (They run)	未来形 (They will run)
格	通格 (father)	属格 (所有格) (father's)
名詞	男性形 (hero)	女性形 (heroine)
	常態・無標形 (高難度、高繁度)	非常態・有標形 (低難度、低繁度)
不定詞	TO 不定詞 (to see)	原形不定詞 (see)

この文脈でふれておかねばならないのが辞書の編纂原理と有標理論の関係である。witch はもともと「魔法つかい」をあらわす通性名詞であったが、中英語期に wizard (ノルマン・フランス語起源) がおとこの魔法つかいをさしてもちいられるようになったため、「魔女」へと意味をせばめた。さらに、時代がすすみ、「悪夢」、「魅惑的なむすめ」その他の意味を順次獲得していく。世界最大の英語辞典としてしられるオックスフォード英語辞典は編年体でかかれた歴史書をよむようによめる。一語の複数の語義をその発生順に配列しているため、利用者は witch という名詞のたどった から へ、そして へという語義の歴史的変遷を追体験することができるのである。

歴史の追体験は一般の辞書ではおこなえない。こころみに、ロングマン現代英英辞典で witch をひいてみても、そこ

からは 1 a woman who is supposed to have magic powers, especially to do bad things(魔女) 2 informal an insulting word for an old or unpleasant woman (婆あ) という情報しかえられない。これはオックスフォードが witch の記述にあしかけ三ページをさき、ロングマンが数行で定義をおわらせているというスペースの多寡によるものではない。通時的編纂(編年体) と共時的編纂という編纂原理のちがいが両種の辞書をわけているのである。ロングマンをはじめ、学習者が通常もちいる辞書は、現代においておこなわれている語義に限定して、複数の定義を繁度の順に配列していることによるのであり、学習辞典が有標理論にもとづいて編纂されていることをしめしている。であるならば、これも利用しない手はない。逆探知によって、第一定義(witch 魔女) を常態・無標形、第二定義(witch 婆あ) を非常態・有標形とみなせばよいのである。言語教育教材(テキストや辞書) を援用する鑑別法は有標理論にたいする素養をみがくための秘策となりうる。

6. 言語変化と有標理論について

話柄をうごかして、ここでは有標理論の魅力をかたってみたい。有標形は無標形に同化しやすいといかんがえは、手紙(1930 年) では引用部冒頭にほのめかされているにすぎないが(「有標値と無標値のあいだの力学的関係」) ヤーコブスンおよびツルベツコイの思索世界にはやくから存在していたようである。歴史的文通の二年後(1932 年) ヤーコブスンは「言語記号が内蔵する非対称構造こそ言語変化をもたらし動因のひとつである」ということばで「力学的関係」をすこしく敷衍している。無標形の優勢、有標形の劣勢という対立項のあいだの力関係(すなわち「非対称構造」) が、無標形による有標形の同化をひきおこしやすいという意味である。しかし、これぞ言語の変化という変化をいっきよに説明する決定的てがかりであると意気込んでいたわけではないことは、「動因のひとつ」といういい回しからあきらかである。変化は言語という有機体に起こるべくして起こり、発起する契機もさまざまならば、帰結も多様である。そのすべてを説明しつくす理論をねだることはまったく現実的でない。というよりも、言語は本然的に首尾一貫性を欠く不合理な実体であって、変化のゆくえは予測しがたいとばかりに、目的論(teleology) を否定しようとしたソシュールの立場が基本的にはただしい。⁵ ヤーコブスンのかんがえは、ある類の言語変化に照明をあてるものにすぎないことをあらかじめ含んでおかなければならない。

非人称動詞(Impersonal verbs) というよばれ方をする動詞群がかつてあった。「ひとがはからずもある状況に巻きこまれているような経験風景をあらわす一群の動詞」(McCawley 1976) というやまわりくどいが、尽くして妙な定義を紹介しておく。rain, shine, snow といったいわゆるお天気動詞(weather verbs) が典型的な例であるが、ほかにも seem, happen, think などがここに属した。古英語の時代、非人称動詞は主語をもとめず、Now rains, now shines.(降ったり照ったりだ) Me seems, this ship made a long distance.(この船は長距離航海をしたようにわたしにはおもえる) Happened, the Picts came from the north.(ピクト人がたまたま北部からやってきた) のようなつかわれかたをした。think も元来は非人称動詞で、seem とおなじようにふるまったものである(Me thinks, I could discover fitter objects of piety. 自分によりふさわしい信心の対象をみつけられたというおもいがわたしにある)。

英語はなぜ非人称動詞をうしなつたのであろうか。わたしたちはこの謎の解明に有標理論をもちいることができる。英語平叙文を代表する語順として SVO が不動の地位を確立するのは中英語期のことである。屈折によって格をあらわした古英語は語順をさだめる必要をもたなかったばかりか、非人称動詞の存在から察せられるように、主語を欠いたセンテンスをさえ正文としてかかえこんでいたのである。だが、SVO の確立によってそれがゆるされなくなった。そこで、いくなれば辻褄あわせのためにもちいられはじめたのが、こんにち「非人称の it (Impersonal it) 」と呼称される主語である(It rains, It snows, It seems to me that..., It happens that...)。やがて中英語話者のあいだに「SV 構文(It rains) は常態・無標形、非人称動詞構文(Rains) は非常態・有標形」という非対称二項対立意識がめばえ、じょじょに成長していったとかんがえられる。それが成長しきったところで、有標形である非人称動詞構文はすてられたのである。有標形は無標形に同化しやすい、とはこの意味をいう。

動詞の活用に弱変化活用と強変化活用がある。5.1 であつた walk-walked など、-(e)d を接尾する活用型を弱変化活用(または子音型活用) とよぶのにたいし、ride-rode, drive-drove, sing-sang など、母音交替(gradation または Ablaut) によって現在形と過去形をわける活用型を強変化活用(または母音型活用) とよぶ。こんにち活発な生産活動をつづけて

いるのは弱変化活用のほうで、あたらしい動詞はことごとく弱変化する（She debuted as a singer in 2005, I googled him など）。強変化活用は古英語末期をもって生産性をうしない、現代英語にのこる強変化動詞はそのすべてが歴史的遺産である。英語の動詞は弱変化動詞をもって主流とするのべることはすこしもまちがっていない。共時的にそうであり、通時的にもほぼそうである。

古英語後期の段階ですでに動詞の四分の三が弱変化型の活用をした。強変化活用は中英語期にはいるとはやくも生産力をうしない、以後の英語史はいっぽうてきに弱変化動詞の増殖をみるのみである。当然のことながら、「弱変化は常態・無標形、強変化は非常態・有標形」という非対称感覚がひとびとを支配したであろう。この対立感覚によって促進され、助長された言語変化に、強変化動詞の弱変化動詞への転向がある。表5にしめした help ほかの動詞はすべて、中英語期以降に強変化から弱変化に移行した。ながいものに巻かれるようにして、水勢の劣る強変化動詞（有標形）が弱変化動詞（無標形）という主流に合一したものであることは、逆方向の同化例がかぞえるほどしかみあたらない事実によっても証拠だてられる。

表5

強変化	（有標）		→	弱変化		（無標）
help	holp	holpen		help	helped	helped
shape	shope	shapen		shape	shaped	shaped
bake	boke	baken		bake	baked	baked
fare	fore	faren		fare	fared	fared
seethe	sod	sodden		seethe	seethed	seethed
thrive	throve	thriven		thrive	thrived	thrived
weave	wove	woven		weave	weaved	weaved

くりかえすが、有標理論によって説明できるのはある特定の型の言語変化にすぎない。にもかかわらず、その数はおそらく膨大であり、本稿はその一、二例をかたることにとどめねばならない。

特定の型にしかすぎないとはいえ、有標理論が解き明かしてくれる言語変化は、およそ人類言語に普遍的に興り、再興し、三興する型に属する。そのことわりとしくみを解明してくれるところに有標理論の最大の魅力がある。くわえて、言語教育へのゆたかな応用性を付加価値にかぞえてよい。5.5でふれたように、言語教育科学はすでに有標理論に依存しているが、依存の程度はいまだじゅうぶんとはいえない。ここでも一、二例をあげるにとどめるが、近現代日本の中等英語教育の現場で、有標理論にもとづく語彙教育を果敢に実践した例はとほしいであろう。かりに家畜語彙を引きあいにだせば（表6参照）cow、bull、oxはおしえるがcattleはおしえず、chicken、hen、cockはおしえるが、fowlはおしえない。たとえcattle、fowlをおしえはしても、それぞれの下位区分語（cow、oxやchicken、hen）と関連づけて、これらが「畜牛」「家禽」の汎称であるというくっきりとした認識をあたえるにいたっていないことがおしまれる。とくにcattleのばあいがそうである。無標形（上位語）は有標形（下位語）よりすくない認知努力で獲得できる、と有標理論はいう（5.5参照）。まず上位語（易）からはいり、それと連動する下位概念として下位語（難）を二次的におしえる語彙教育が事理にかなっていることはいうまでもない。

表6

上位語	（無標）		下位語		（有標）
汎称	子ども	雌	雄（非去勢）	雄（去勢）	
cattle	calf	cow	bull	ox	

fowl	chick	hen	cock (BrE)	capon
	chicken		rooster (AmE)	
sheep	lamb	ewe	ram	wether
horse	colt (male)	mare	stallion	gelding
	filly (female)			
swine (formal)	pig	sow	boar	hog
pig	gilt (female)			

Manners makes man. (礼節ひとをつくる) は歴史の証言者である。複数名詞主語が動詞現在形の-(e)s 終止 (よりふるくは-(e)th 終止) をもとめた古英語のおもかげをいまにつたえるのがこのことわざである。また、Money makes the mare to go. (地獄のさたも金しだい) は、使役動詞の目的補語に原形不定詞をもちいるという近代英語の規則が成立する以前の英語のすがたをしのばせる。Handsome is that handsome does. (みめより心) や To Whom It May Concern (関係各位) も歴史の貴重な生き証人といえる。こんにち what と-ever 形 (whoever, whomever, whichever など) にかぎられてしまった名詞的關係詞 (nominal relatives, 先行詞を抱きこんだ關係詞) が前近代英語期にはより広範にもちいられていた事情をほうふつとさせる。英語教育はこれらを定型表現あるいはイディオムとして理外におく。非理性によって棒暗記するしかない表現として処理されるという意味である。それらが膨大な数にのぼるにもかかわらず、ほんの一部しかあつかえていないという実情はこのことと不離ではない。「近現代英語への歴史の介入」(5.2 参照) ということばをおもいだすべきであろう。後代の規則 (常態・無標形) と歴史遺産 (非常態・有標形) のあいだの力学的關係が二十一世紀をいきる言語のなかに展開しているのである。構造主義的言語觀を導入することによって、教育ははるかに多くの非理性的表現を理性の埒内におさめることができるのであるし、そもそも現代語の文法によって説明できない表現群を過去の遺物としてすべて切り捨ててしまっていては生命体としての言語に感応するところはやしなえない。有標理論のより積極的な応用がのぞまれる。

7. 有標性の交替について

手紙末尾のことばの意味にふれて、この稿をしめくりたい。

思いついたまま書くのですが、詩人のミジャコフスキーは生というものを動機づけられてはじめて実現される有標値とみました。彼にとっては、死ではなく生のほうが動機づけを必要としたのです。(中略) また、こういうこともあります。かつてソヴィエトには「われわれに敵対しないものは同志である」というスローガンがありましたが、いまではそれが「われわれにくみしないものは敵対者である」というスローガンに席をゆずりつつあります。(中略) これも貴兄のかんがえに触発されてうまれた確信といえますが、一見えらぶところのなさそうな民族学的現象やイデオロギーなども、ある制度のもとでは有標であるが、ところをかえれば無標以外のなにものでもないといったばあいが往々みとめられるものです。

うへの二文はどちらも有標性の交替 (markedness reversal) という用語であらわされるかんがえを例証している。対立する二項のどちらを有標形とみなすかは万世不変でもなければ、人文地理を超越する定理でもない。時代によってうごくことがある。それがソヴィエトのスローガンのばあいである。また、状況によってうごくことがある。それが民族学的現象・イデオロギーのばあいである。

言語に類例をもとめてみよう。時代によって交替する例はこれまでの記述のなかにも織りこまれているが (5.1、5.2、6 参照) 最後にもう一例つけくわえておいてよいのは I can't do nothing/Nobody never went there などのいわゆる二重否定のあつかいである。十七世紀までは、「否定 + 否定は肯定」という形式論理が言語使用の場にもちこまれることはなく、二重否定は単なる否定の強調とみられた。用例もおおく、かずある否定形式のなかでとくに浮きあがっていたわけでは

ない。いわば常態であり、無標形であったのである。十八～十九世紀に栄えた規範文法⁶により、二重否定は非論理的とみなされ、有標化された。こんにちもちいれば、方言あるいは俗っぽい英語とみなされるであろう。

状況によって交替する有標性の例としてはつぎがわかりやすい。小学校教師は Robert Sweet という名の男子児童をふだんは Bob とよんでいる。Bob は常態・無標形である。ところが、この男児をはげしくしかるとき、教師は “Mr. Robert Sweet! Could you please stop it?” というであろう。Mr. Robert Sweet は、はげしい叱責というめったに起こることのない非常事態のためにとっておかれる非常態・有標形である。しかしながら、こういうかんがえかたもできる。教師がはげしく叱声するときの定表現は “Mr. Robert Sweet! (Could you please stop it?)” であり、フルネームの使用が原則（常態・無標形）である。そしてここで、“Bob! (Stop it.)” といえ、原則からはずれた非常態・有標形（Bob）をつかったこととなる。使用域（register）をどう設定するかによって無標と有標が入れ替わる例である。

「詩人のミジャコフスキーは生というものを動機づけられてはじめて実現される有標値とみしました。彼にとっては、死ではなく生のほうが動機づけを必要としたのです。」と語られているウラディミール・マジコフスキー（1893-1930）はフォルマリズム運動をリードしたロシアの詩人である。なにが詩人をこのような省察に駆り立てたのかはわからない。だが、有標性の交替の、これもまたひとつの例証といえそうである。「生は常態・無標値、死は非常態・有標値」が通念であろう（1章参照）。しかし、かんがえかたひとつでこの通念は破碎される。たとえば、歴史は悠久の時間とともにあるが、人間はその歴史のひとつ呼吸にもみえない寸陰をいきるにすぎないとかんがえてみることができる。繁度指標によるならば、「死は常態・無標値、生は非常態・有標値」となる。

注

1. 矛盾対当（contradictory opposition）は論理学用語。unkind, impossible, careless のように、接辞をもちいた派生語のかたちであらわされる対立概念のこと。
2. おなじく論理学用語である。反対対当（contrary opposition）は、（near にたいする）far、（young にたいする）old、（simple にたいする）complicated のように、別個の語であらわされる対立概念をいう。
3. 重箱読み、湯桶読みがおこなわれる漢語といえど、視覚的には通常の漢語とかわるところがなく、異質なのは読みかただけである。聴覚的にも視覚的にも混種性が知覚されやすい英語の混種語のばあいと同日の談にはできないとする立場もあるが、音声中心に言語をかんがえる欧米の言語学からみればあきらかに混種語である。
4. Barber（2008: 91）がこれを仮説として紹介している。弱変化活用の大起源は古ゲルマン語にあるから、この説がどこまで正しいかは疑問である。なお、Smith（1998: 160）は「cut, put, set など、現在形と過去形が同一のばあい、過去形をあらわすために虚辞の did がひところもちいられた」とのべ、『欽定英訳聖書』（1611年）「出エジプト記」から“...and no man did put on him his ornaments”を引いている。これはまた別の議論ではあるが、英語話者が現在形を常態、過去形を非常態とする感覚をふるくからもっていたことの証しにはなる。
5. 言語はあらかじめ定められた目標の達成にむけて変化していくとするかんがえを目的論（teleology）という。Saussure（1916: 208-210）はいくつかの例外（省力原理 Principle of Least Effort など）をもうけながらも、基本的には目的論を否定する立場をとった。
6. 言語のありのままのすがたに関心をむける態度を記述主義（descriptivism）とよび、これにたいして言語のあるべきすがたを関心事とする態度を規範主義（prescriptivism）とよぶ。十八～十九世紀は英語史における規範主義の時代であり、規範文法家たちはラテン語文法と論理学の立場から shall と will の用法を整理したり、分離不定詞（split infinitive）や座礁前置詞（stranded preposition）をしりぞけたり、多重否定（二重否定をふくむ）を排除するなどした。

参考文献

Barber, C. (2008). *The English Language: A Historical Introduction*. Cambridge: CUP

Joseph, J. E., Love, N., and Taylor, T. J. (2001). *Landmarks in Linguistic Thought II*. London: Routledge.

Saussure, F de. (1916). *Cours de Linguistique Générale*. Paris: Payot

Smith, J. (1998). *An Historical Study of English: Function, Form and Change*. London: Routledge.

Jakobson R. (1932). The Structure of the Russian Verb. *Russian and Slavic Grammar Studies, 1931-1981*. Linda R. Waugh and Morris Halle (eds.). Amsterdam: Mouton.